

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380854

研究課題名(和文)「新型うつ」に関するパーソナリティと社会的認知の研究

研究課題名(英文)Personality and social cognition of "modern-type depression"

研究代表者

坂本 真士(SAKAMOTO, Shinji)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20316912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「新型うつ」の発症に関する社会的認知とパーソナリティの研究である。まず「新型うつ」は公式の定義がないことから、「新型うつ」のパーソナリティ研究を始める際に、「新型うつ」について書かれた書物から「新型うつ」のパーソナリティ特徴をまとめた。それをもとに「新型うつ」の発症を予測する尺度を作成し、尺度の信頼性・妥当性を検討した。また、社会的側面として、うつ病に罹患していると発言することが社会的苦境場面における弁解として機能する可能性や、一般の人のもつ「新型うつ」に関する信念を検討した。これらの知見と先行研究を参考にして、「新型うつ」の発症に関する心理学理論を提案した。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to explain "modern-type depression" (MTD) light of social cognition and personality. At first, because there is no official definition of MTD, we searched books about MTD and summarized personality features of person with MTD in order to launch on personality study of MTD. Then, referring to the results, we constructed a scale which may predict the onset of depression, and tested its reliability and validity. As the approaches from social cognition, we examined the possibility that stating "I may be suffering from depression" may function as an excuse in social predicaments. We also examined lay person's beliefs about MTD. Referring to previous studies as well as these studies of ours, we proposed psychological theory of MTD.

研究分野：社会心理学

キーワード：抑うつ パーソナリティ 社会的認知 新型うつ 臨床社会心理学

1. 研究開始当初の背景

従来のうつ病とは異なり、嫌な出来事を経験すると抑うつ的になるが、余暇を楽しく過ごすことができるなどの特徴をもつうつ状態(いわゆる「新型うつ」)が社会問題化しつつある。「新型うつ」に対しては精神科領域からの考察が目立つが、抑うつ者の認知や個人差の解明に社会心理学(例:原因帰属、自己注目)が貢献してきたように、社会心理学が「新型うつ」の人の認知や個人差を解明し介入へ示唆をもたらすと期待される。

調査した限り、「新型うつ」に関する社会心理学的な実証研究は皆無であるが、精神医学や臨床心理学の専門家と交流する中で、社会心理学的研究の必要性が強く示唆された。たとえば、「新型うつ」の心理的特徴のひとつに拒絶への過敏性が挙げられるが(坂元, 2009)これは rejection sensitivity (Downey & Feldman, 1996) という概念に近く、「新型うつ」の個人差を解明する有力な概念であると言える。

また、「新型うつ」増加の背景には、啓発活動によるうつ病イメージの改善があったと考えられている。うつ病に対するスティグマが弱まり、「うつ病患者」という患者役割(山本, 2007)に対する抵抗感が薄れれば、ストレスフルな状況から逃れるために半ば自己呈示的に「自分はうつだ」と主張する可能性も高まるだろう(Leary, 1995)。仮にそうだとすると、これまで脳内の代謝異常が関与する病気と見られてきた「新型うつ」は、極めてストレスフルな環境への対処方略と考えることもでき、「新型うつ」の介入の仕方にも再考を迫るものになる。「新型うつ」は抗うつ薬が効きにくいとされており、心理学(特に社会心理学)からの貢献が期待される。

2. 研究の目的

本研究は、研究課題名にもあるように「新型うつ」に関してパーソナリティと社会的認知の両面から研究する。具体的には以下の通りである。

(1) パーソナリティからの検討

1年目には、「新型うつ」の個人差のひとつと考えられる“拒絶への過敏性(仮称)”を測定する尺度を作成する。「新型うつ」の心理的特徴を精神科医・臨床心理士と相談して概念的検討を行い、尺度を作成する。2年目は、学生を対象に、作成した尺度の信頼性・妥当性を検討する。

(2) 社会的認知からの検討

1年目には、うつの社会的イメージを検討する。一般の人が「新型うつ」をどのように受けとっているか知るために、素人理論にもとづく質的研究を行う。また、他の精神疾患と比較するためのイメージ調査を実施する。2年目には、自己呈示としてのうつを検討する。うつを防衛的・戦術的自己呈示として用

いやすい条件や個人差についてのモデルを構築し、実証的に検討する。

(3) 総合的検討

「拒絶への過敏性が高い人は、他者からの拒絶を避けるために、理由として利用可能であればうつを自己呈示しやすい」という仮説を検討すべく、実験や調査を行う。また、学生を対象にして「新型うつ」と拒絶への過敏性との関連を検討する。

3. 研究の方法

本研究はおもに5つの研究より構成されるため、それぞれを分けて記述する。

(1) パーソナリティ特徴の抽出と整理

「新型うつ」には公式の定義がないため、「新型うつ」のパーソナリティ的側面を検討するためには、ひとりの研究者や実践家の意見に偏らず意見を集めることが必要である。そこで、「新型うつ」に関する書籍を調査し、そこに現れるパーソナリティの記述を収集することから始めた。インターネットを用いて情報を収集し、14の書籍を特定した。その書籍の中から「新型うつ」のパーソナリティ特徴と思われる記述を集め、KJ法によりまとめた項目を、13名の精神科医と11名の臨床心理士に提示し、「新型うつ」に特徴的な記述を選択してもらった。

(2) パーソナリティ的側面に関する尺度の作成と検討

(1)の結果から、「新型うつ」のパーソナリティ特徴として、以下の6点が見いだされた。他者からの評価に対する過剰な反応、他者の反応への敏感さ、回避、被害者意識、自己の優先、自己愛の強さ。そこでこの6側面の内容を反映させた54の項目を作成し、「対人過敏・自己優先尺度(Interpersonal Sensitivity/Privileged Self Scale: IPS)」の項目とした。大学生計804名を対象に信頼性と妥当性を検討した。すなわち、1ヶ月の間隔をあけた再検査信頼性を検討し、因子的妥当性と基準関連妥当性を検討した。

(3) 一般の人のもつ「新型うつ」のイメージ(素人理論からの検討)

専門家ではない一般の人々が「新型うつ」に対してどのようなイメージを持つかを検討するために、225人の学生および103人の社会人を対象に質問紙調査を実施した。質問紙調査では文章完成法を用いて回答を求めた。「新型うつ」「新型うつの人々」「新型うつの原因・理由」という語句を主語とする文章を、それぞれ制限時間2分間で最大20文まで書くように求めた。その他に、「新型うつ」という言葉を知っているかどうか、知っている場合にはどこでどのような内容を知ったか、個人属性などについて回答を求めた。

(4) 「新型うつ」の人に対するイメージ(ケ

ース提示による検討)

「新型うつ」のひとがどのようなイメージをもたれているかを、「従来型うつ」との比較を通して検討した。精神科医の監修のもと、「新型うつ」および「従来型うつ」の人の行動を記述した文章(ケースビネット)を用意した。これを大学生 206 人に提示し、どのようなイメージをもつかを質問した。順序効果をなくすため、約半数の研究参加者には、新型うつと従来型うつのケースビネットの提示順を逆にした質問紙を実施した。

(5) “うつ病かもしれない”と発言すること(うつ病暗示)の弁解効果

自己呈示理論で示されているように、精神疾患の状態を示すことは防衛的・戦術的自己呈示として機能している可能性がある。しかし「新型うつ」と目される人々の場合、従来型うつ病に比べ精神疾患としての状態(症状)が軽度だと指摘されている。そこでまず、ケースビネットを使った質問紙実験を大学生 344 人に対し、うつ病暗示を行うサクラを使った実験室実験を大学生 57 名に対しそれぞれ実施し、失敗に対する責任を問われた際、うつ病の症状を全く示さない人物が“うつ病暗示”をすることが、弁解として機能するか検討した。次に、弁解としての“うつ病暗示”の特徴を検討するために、のべ 419 人の大学生に対し質問紙調査を実施し、一般的な弁解と“うつ病暗示”の評価のされ方を検討した。最後に、どんな弁解をするか選択する際に予備知識(例:啓発活動の影響)が与える影響について大学生 64 名を対象とした実験室実験によって検討した。

4. 研究成果

研究成果についても、先に記した 5 つの研究のそれぞれに分けて記述する。

(1) パーソナリティ特徴の抽出と整理

「新型うつ」に関する 14 の書籍から抽出した、「新型うつ」のパーソナリティ特徴と思われる 105 の記述を KJ 法により 64 項目にまとめ 3 つの大ラベルに分類した。それらの記述を、13 名の精神科医と 11 名の臨床心理士に提示し、「新型うつ」に特徴的な記述を選択してもらった結果、「新型うつ」で見られ従来型うつでは見られない 15 の特徴や、「新型うつ」と従来型うつの両方に見られる 11 の特徴が明らかとなった。前者は、対人過敏傾向(周囲からの評価を過剰に気にする傾向; 6 項目)と自己優先志向(自己の快感情を他者よりも優先する傾向; 5 項目)、「うつ」のアピール(自分がうつであることを主張したり示唆したりする; 4 項目)の 3 種よりなるが、後者は対人過敏傾向が 11 項目中 7 項目を占めた。

「新型うつ」の明確な定義がない中では、専門家による記述が貴重な手がかりとなる。専門家による記述を広く集め、まとめ、概念的整理をした本研究は、「新型うつ」研究に

おける貴重な資料である。ただし、量的な研究を行うためには、概念の操作的定義として尺度を作成する必要があり、今後の課題となった。

(2) パーソナリティ的側面に関する尺度の作成と検討

尺度を因子分析した結果 6 因子に分かれ、さらに 2 次因子分析をした結果この 6 因子が 2 つの上位因子を構成した。この結果は、項目作成に関して仮定した因子構造と一致しており、因子的妥当性が確認された。尺度の基準関連妥当性は、抑うつ症状との関連、メランコリー親和型性格(従来型うつ病前性格)との関連、抑うつのタイプとの関連、すなわち、非定型うつ(新型うつの概念に含まれる)や、メランコリー型うつ(従来型うつの概念に含まれる)に分類されるか、を検討した。その結果、以下のように妥当性が確認された。尺度のすべての下位尺度得点と抑うつ尺度との間に正の相関が認められた、対人過敏傾向に関する下位尺度はメランコリー親和型性格との間に正の相関が認められたが、自己優先志向に関する下位尺度は有意な相関を示さなかった、分散分析により、非定型群における独善得点(自己優先傾向の下位尺度)は、メランコリー型群に比べて有意に高い結果得点を示した。さらに再検査の相関を検討した結果、IPS は良好な再検査信頼性を持つことが示された。これらの結果から、IPS は妥当性と信頼性を有すると言える。

「新型うつ」のパーソナリティ特徴に関する尺度を作成し、信頼性・妥当性を示したことで、「新型うつ」の発症に関する実証的研究を行うことが可能となった。ただし、因子分析の結果抽出されたられた因子には、構成する項目が 2 つのものがあつたため、項目の追加などの改訂が必要と思われる。

(3) 一般の人のもつ「新型うつ」のイメージ(素人理論からの検討)

調査協力者の約半数弱が「新型うつ」について調査前から知っていると言っていた。学生回答者においては、「新型うつ」の人の特徴として「従来型うつ病の人とは違う行動をする」「人と接するのが苦手」「真面目な人」「甘やかされた人に多い」といった回答が見られた。メディアで伝えられる「新型うつ」の特徴の他、従来型うつ病の特徴も含まれていた。また、原因については、「ストレス」「仕事」「人間関係」「環境」「会社」「社会」など背景要因に係る語、「心」「弱い」など内的要因に係る語が出現していた。具体的な記述をみると、「ストレスがたまりすぎる」「自分の心の弱さ」「自分に自信が持てない」などといった記述が見られた。

社会人回答者においては、「新型うつ」の人の特徴として「若い人に多いこと」「退社すると元気になる」などがあげられており、

「新型うつ」についてメディアで伝えられる内容と対応している内容がみられた。また、原因については、仕事の仕方や取り組み方、職場や家庭の対人関係、性格などが多くあげられていることが示された。

このように、回答者が学生か社会人かによって「新型うつ」に関する記述の内容が異なっていた。今後はそれぞれがどのようにしてイメージを形成するにいたったのかプロセス詳細に検討する必要がある。

(4) 「新型うつ」の人に対するイメージ(ケース提示による検討)

新型うつ、従来型うつ双方のケースピネットで、主人公(うつ状態の人)は日常生活に支障をきたすほどの状態で、仕事でのミスが多くなったことをアンダーラインを付して提示し、認知される重症度と機能障害度を揃えるよう試みた。しかし認知された重症度および機能障害度には有意差が見られた。すなわち、重症度については従来型うつの方が重症だと判断されたが、機能障害については逆に新型うつの方が重症と判断された。重症度と機能障害はイメージに影響を与えることからこれらを共変量として扱い、共分散分析を行った。その結果、従来型うつの方が有意に大きな値を示したのは以下であった：うつ病の診断、精神療法の効果、自傷の可能性、性格に原因、ケースピネットの主人公を助きたい動機づけ。一方、新型うつの方が有意に大きな値を示したのは以下であった：他害の可能性、努力不足に原因、人間関係に原因、育てられ方に原因、ケースピネットの主人公を避けたい動機づけ。これらのことから、全体的に見ると新型うつの方がネガティブなイメージを与えることが示された。また、努力不足などの統制可能な要因に原因帰属することが、ネガティブなイメージと関連することが示唆された。

「新型うつ」は一般的にネガティブなイメージをもたれていると考えられたが、そのことが本研究で示された。また、その原因として、うつ状態の、統制可能な要因への帰属が示唆された。この成果をもとに、「新型うつ」に対する啓発を検討することができる。

(5) “うつ病かもしれない”と発言すること(うつ病暗示)の弁解効果

まず、質問紙実験と実験室実験の双方を通じ、たとえうつ病の症状を全く示さずとも“うつ病暗示”は中程度に効果的な弁解として機能することが示された。つまり、何も弁解しない場合や、不適切な弁解をするよりも、印象の悪化を抑制したり、罰や叱責を弱めたりする働きがあった。次に、弁解としての“うつ病暗示”の特徴を一連の調査を通じ検討した結果、“うつ病暗示”は一般的な弁解に比べ「追及しづらい」という評価が顕著に高いことが示された。また、「追及しづらさ」の評価は弁解効果と正の相関を示した。このこ

とから、症状が比較的軽度な「新型うつ」の人が、自らはうつ病であるとアピールすることに対し、周囲の人は追及しづらさを感じて寛大な対応をとっていることが示唆された。最後に、弁解をするか選択する際に予備知識(例：啓発活動の影響)が与える影響について検討した結果、何がその状況において弁解として有効かを示す情報があると、人はその情報に合致するような弁解を用いることが示された。この結果は「新型うつ」増加の背景に啓発活動の影響があるという論考を実証的に裏付ける結果と考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

(1) Yamakawa, I., Muranaka, M., & Sakamoto, S. (2015) Validity and reliability of the Interpersonal Sensitivity/ Privileged Self scale: Solving a new type of depression. *Psychology*, 6, 1013-1021. (査読有)
DOI: 10.4236/psych.2015.68098

(2) Yamakawa, I., & Sakamoto, S. (2015) Insisting on depression, but not showing symptoms: A Japanese study of excuse-making. *International Journal of Psychological Studies*, 7, 146-154. (査読有)
DOI: 10.5539/ijps.v7n2p146

(3) 村中昌紀・山川樹・坂本真土 (2015) 専門家は「新型うつ」をどのようにとらえているか 書籍からの抽出と臨床家への調査 *日本大学心理学研究*, 36, 44-51. (査読有)

(4) 坂本真土・村中昌紀・山川樹 (2014) 臨床社会心理学における“自己”：「新型うつ」への考察を通して *心理学評論*, 57, 405-429. (査読有)

[学会発表](計16件)

(1) Yamakawa, I. & Sakamoto, S. Reconsidering the evaluation dimensions of excuse: “hesitating to ask” as a new evaluation dimension. *Society for Personality and Social Psychology 17th Annual Convention*. 2016年1月29日 San Diego (U.S.A.)

(2) 勝谷紀子・坂本真土 マスメディアにおける「新型うつ」：記事データベースによる検討. *日本社会心理学会第56回大会*. 2015年10月31日 東京女子大学(東京)

(3) 村中昌紀・山川樹・坂本真土 大学生を対象とした新型うつ病のイメージ調査(2). 日本社会心理学会第56回大会. 2015年10月31日 東京女子大学(東京)

(4) 山川樹・坂本真土 弁解手がかり情報がその後の弁解内容に及ぼす影響. 日本社会心理学会第56回大会. 2015年10月31日 東京女子大学(東京)

(5) 村中昌紀・山川樹・坂本真土 大学生を対象とした新型うつ病のイメージ調査(1) ケースビネットを用いた従来型うつ病(メランコリー型うつ病)との比較. 日本心理学会第79回大会. 2015年9月23日 名古屋国際会議場(愛知)

(6) 山川樹・坂本真土 弁解内容がもたらす効果の違いに関するサクラを用いた実験. 日本心理学会第79回大会. 2015年9月22日 名古屋国際会議場(愛知)

(7) 村中昌紀・坂本真土 対人過敏・自己優先尺度の作成(3) - 抑うつの重症度, およびタイプに及ぼす影響についての縦断的検討 -. 日本心理臨床学会第34回秋季大会. 2015年9月20日 神戸国際会議場(兵庫)

(8) Yamakawa, I. & Sakamoto, S. How effective is "insisting on depression" as an excuse? The Annual International Conference on Cognitive - Social, and Behavioural Sciences (icCSBs) 2015. 2015年8月3日 Nicosia (Cyprus)

(9) 勝谷紀子・岡隆・坂本真土 「新型うつ」のしろうと理論(3): 社会人を対象とした検討. 日本社会心理学会第55回大会. 2014年7月26日 北海道大学(北海道)

(10) 村中昌紀・山川樹・坂本真土 対人過敏・自己優先尺度(IPS)の作成(1) 抑うつの重症度, タイプとの関連. 第11回日本うつ病学会総会. 2014年7月19日 広島国際会議場(広島)

(11) Yamakawa, I., Muranaka, M., Tanaka, E., & Sakamoto, S. Cognitive and behavioral features of Modern type depression in Japan. 22nd International Congress of the Association for Cross-Cultural Psychology. 2014年7月17日 Reims (France)

(12) Muranaka, M., Yamakawa, I., Matsuura, T., Saku, H., & Sakamoto, S. Personality features of modern type depression. 5th Congress of Asian Psychology Association. 2014年3月25日 Tokyo (Japan)

(13) 勝谷紀子・岡隆・坂本真土 「新型うつ」のしろうと理論(2): 人々の特徴や原因の検討. 日本社会心理学会第54回大会. 2013年11月3日 沖縄国際大学(沖縄)

(14) 山川樹・坂本真土 弁解の評価次元と許しの関係. 日本社会心理学会第54回大会. 2013年11月3日 沖縄国際大学(沖縄)

(15) 山川樹・坂本真土 弁解の分類次元に関する検討. 日本心理学会第77回大会. 2013年9月20日 札幌コンベンションセンター(北海道)

(16) 勝谷紀子・岡隆・坂本真土 「新型うつ」のしろうと理論 日本心理学会第77回大会 2013年9月19日 札幌コンベンションセンター(北海道)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 真土 (SAKAMOTO, Shinji)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号: 20316912

(3) 連携研究者

岡 隆 (OKA, Takashi)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号: 80203959

石垣 琢磨 (ISHIGAKI, Takuma)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号: 70323920

大塚 耕太郎 (OTSUKA, Kotaro)
岩手医科大学・医学部・教授
研究者番号: 00337156

橋本 剛 (HASHIMOTO, Takeshi)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 60329878

勝谷 紀子 (KATSUYA, Noriko)
青山学院大学・社会情報学部・助教
研究者番号: 90598658

藤澤 大介 (FUJISAWA, Daisuke)
慶應義塾大学・医学部・講師
研究者番号: 80203959

松浦 隆信 (MATSUURA, Takanobu)
鹿児島大学・臨床心理学研究科・准教授
研究者番号: 40632675